26年前のこと

齋藤定
元筑波大学研究協力部研究協力課
体芸事務区技官（写真）

2003年夏・新宿で

先日、仕事を終えた後に、新宿で久しぶりに写真仲間の 4 人と酒を酌み交わした。話の多くは当然ながら写真のハードやソフトの問題が中心となってしまうのだが、古い写真の話から、幼年の頃の鮮明に残る記憶について話しが進んだ。偶然にも 2 人が父親との思い出をあげたのだが、私は、3 ― 4 歳の頃、家にいたる数分の緩やかな坂の砂利道を父の手を握ってゆっくりと歩いている姿が記憶に残っている。幾度か思い出す記憶というものは、回を重ねるごとにイメージが増殖したり変容していくものであろうか、いまではその情景を客観的に見たかのごとく、前や後ろから、また真横からその光景を想起することができる。現在の私は50歳を過ぎて、父親はこの世にあらず生家も取り壊されたが、父と共に思い出すその道は舗装されたりはしているが、私と父ほどには変化はしていない。

1977年秋・筑波研究学園都市

筑波大学には、専門学校の写真の授業で教えていただいた大辻清司先生の導きで、1977 年の秋に技官として赴任した。いろいろな匂いがこもる常磐線に乗り込み、いつ到着するのか見当がつかない土浦からのバスに揺られて大学西のバス停に降り立ったとき迎えてくれたのは、杭打ちのドーンという音であった。間違いなく着いたという安堵と、初めてのことの緊張感ゆえに、その音が私の身体を地響きのように揺らした記憶がある。

いたるところが仮囲いで、目的のガラスブロックの建物はすぐに探し当てることができたが、当時はその体芸棟の中に事務局本部が置かれていて、芸専棟には現在の学系棟ができるまで教官室があった。教官室は間仕切りもない大部屋で、机や椅子、書類などが所狭しと置かれている状態の中、狼煙のようにあちらこちらで細く立ち昇るタ

バコの煙が部屋に充満していた記憶がある。

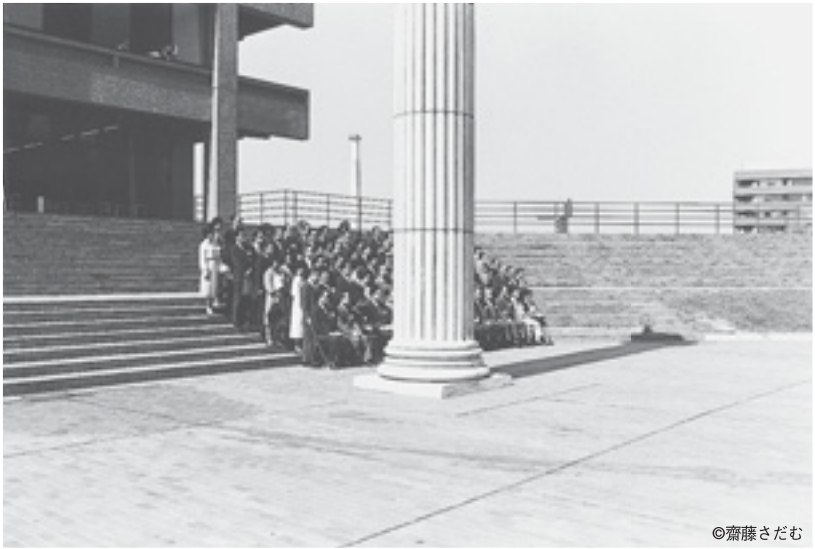
在籍中の何人かの先生方に紹介されたのだが、近所のおじさんのように穏やかに笑みを返されて、到着したという気負いと同時に、私の神経は妙に安らいだようだ。当時30歳にもならないどうとでもなる身軽さと自由の意気込みでやって来たのだが、外に広がる発展途上の風景と作業が終了した夕暮れ時の工事現場の静けさは、過去と未来の狭間で右も左もわからない私を実際以上に感傷的にしたような気がする。大学での仕事は授業の補助や研究の補助が主要な業務であったが、工事途上の学系棟や工房棟のための設備備品関係の資料収集や、東京教育大学からの移品管理、設備機器のメンテナンスなどさまざまで、知らないことも多くて同僚に聞いたり、メーカーに直接電話したりの日々であった。

住まいは東大通りと土浦学園線が交差する西側の中高層の独身寮で、見晴らしのよい空間に気分は晴れるのだが、そこから大学まで通勤するのがこれまた一仕事だった。区画整理が終了したばかりの当時の学園中心地区は土がかぶった道路と残土と草むらばかりで、東大通りは上に架ける歩道橋工事でバスは通らず、バス停は現在のNTTあたりにあったのだが、雨や雪の日の道はドロドロで乾いた日には砂埃が舞って、行きも帰りも困難の連続だった。帰りの最終バスに乗れない時などは同僚や先生方が相乗りで寮まで送ってくれるのだが、当時の環境下ではそれも至極当然のように誘ってくれたのだった。つくばは車がないと生活できないということを、その頃に強く実感したものである。

「甘い生活」

つくばで生活するための必需品の買い入れのために、土日はよく土浦にでかけた。映画の好きな私は、土浦での買い物ついでによく映画を見たものである。当時はまだ週末は特別にオールナイト上映が行われていて、学生や新住民のために、あまり興行収益の望めない映画でも深夜上映されていたのである。

赴任して2年後に結婚した妻とは土曜日の深夜にもたびたび映画館にでかけたが、フェデリコ・フェリーニの「甘い生活」を見た時は劇場には私たちのほかに客は1人で、その客も30分もせず消えてしまい、残りの2時間半、あのおどろおどろしい映画を2人で貸しきりで見たことがあった。なんとも贅沢でかつ不安と不吉が入り交じる映画に自身を重ね合わせて、暗闇で集中したことを思い出す。その映画館も数年後には映画「ライト・ショウ」のごとく深夜興行をやめてしまったが、不毛なつくばに住む映画好きに生涯忘れることのない経験を



1980年 永年勤続表彰　記念撮影

させてくれたことは、感謝とともに記憶に残っている。

当時のつくばではこんな経験もした。年末年始をつくばで過ごすことにした最初の年、大学も休みとなり学生たちも帰省して静まり返った学内から、さて昼飯でもと学外の飯屋にゆくと、扉には年末年始休暇の張り紙。それではと何軒か回ってみたがすべてが休業中で、まずい……といういやな予感どおりに小売店もすべて営業しておらず、たった1人孤島に取り残されたことに気がついたのである。時すでに遅い12月30日のことだった。

2003年の浦島太郎

あれから26年、私はいまもつくばに住み写真の仕事をして生活しているのだが、当時を振り返ってつくばを見ると、竜宮城から戻った浦島太郎が玉手箱を開けてしまったほどに私も白髪になり、つくばも筑波大学も、その頃の面影を見つけるのは難しいほどに変貌した。浦島太郎は楽しさに飽きて戻って来た時にあまりにも長かった空白を感じるのだが、ずっとつくばに住んできた私も、埋めることのできない空白を感じる時がある。その空白とは、ひとつの大学の、そしてひとつの街の成長とともにあった自分の暮らしや周囲の人々との交友が、私の肉と化したことの無意識によるものなのかもしれない。

（さいとう　さだむ）